

乳幼児期における遊びの教育的意義についての一考察

—ピアジェの子ども理解の視点を軸に—

Consideration on Pedagogical Importance of Playing in Infancy

—Based on Piaget's Viewpoint of Understanding Children—

猪田裕子

要旨

児童心理学者であるピアジェ (Piaget, Jean. 1896-1980) の残した足跡は偉大なものである。特に、国際新教育運動に深い理解を示し、その運動を推進させ、国際連盟の援助のもとジュネーブに創設した国際教育事務局の局長として活躍する姿に、彼の子どもに対する深い理解が伺える。

また、ジュネーブにあるルソー研究所附属幼稚園で子どもの思考の研究を行った際には、子どもの自発的で自由な活動である遊びとその環境との関係に関して「ジュネーブの幼稚園における子どもらは、その座右に教育的遊びの材料を持っている。これらをもって彼らは全く自由に遊ぶものである」と言及している。

この様な彼の研究の視点は、現在でも子どもの発達や教育において非常に重要なものとなっている。しかし、彼はその考えや理論に基づいて実際的な教育方法を示唆している訳ではない。

そこで、実際の保育現場で、どの様に彼の研究が応用され展開されているのかを、保育者の観察記録に基づき検証する。また、彼の子ども理解の視点が、現場の保育者にどの様に理解され、それが一人一人の子ども理解にどの様に反映されているのかを考察する。これにより、乳幼児教育における遊びの教育的意義が更に深まると考えるからである。

キーワード：遊び 学び 主体性 自由

1. ピアジェにおける遊びの教育的意義

i) ピアジェにおける自由な遊び

ピアジェは自身の研究において、子どもの活動の自由性、つまり自発的な活動に着目し、知識の発達段階をはじめ様々な研究を行った。そして、自由の価値を「個人の自由が必然的な価値となるのは、協力が制約に打ち勝った時のみである」²⁾とした。ここでの協力とは、強制的でもなければ順応主義でもない。また、上下関係に支配される事もない。それは、常に平等で、分化した個々

人間の相互作用の全体の事である。そこには、個人の自律として、思考の自由や道徳的自由、政治的自由等、全てにおいて解き放たれる自由が存在する。更に、協力により育まれる自由には、知能や理性の教育が前提とされている。つまり、自由には個々人における自律的学びが存在する。

しかし、威圧的な管理の下では、思考する事を学ぶ事は難しい。思考すると言う事は、他からの強制や指示はなく「自分自身による探究であり、自由に批判する事であり、自律的な方法で証明する事である」³とピアジェは言う。それ故「思考は知的機能の自由な働き (jeu)」⁴を前提にしているのである。

ここでの自由な働きを、ピアジェは遊びである「jeu」と言う語を用いている。「知能機能の自由な遊び」と表現すると違和感を覚えるかもしれないが、遊びとは自発的な活動である故、その意味を包含したうで、「自由な働き」と訳者は表現したのであろう。つまり、ピアジェにおいて自由な遊びとは、そこに思考が伴っている事を指していると言える。

しかし、日本の幼児教育において、未だ一日の大半が指示と義務に支配された子どもの姿は少なくない。意識的ではないにしろ、このような子どもの姿に対し、ピアジェは「その結果、服従の、あるいは他律性の道徳と言う事になり、もしそれが文字通りに捉えられるならば、最も厳格な社会的な順応主義に導かれるだろう」⁵と言う。自分の意見を述べる事なく、教師や親の言葉に従い、常に優等生を演じる子どもを育てる為に、我々は教育に従事しているのではない。この事をピアジェの言葉を借り、自らの内に留めて置きたいものである。

更に、彼は「生活があって、その生活の中に仲間がおり、また子どもの中の社会的関係がある」⁶と述べている。彼の考える自由な遊びとは、生活が基盤となっており、そこに社会的関係における子どもの自発的活動が存在する。これは、まさに現代の日本社会が目指している保育の姿であり、遊びの基盤であると言える。また、教師の姿においても「まず何よりも教師の態度のすべてに依存するのか？教師は、独裁者の役割を果たし、クラスを絶対的な君主制またはある種の道徳的神聖政治へ変える事を望んでいるのか？彼はその力を持っている。しかし、彼は、自由であると共に内的な規律を持った市民を養成しようとしているのか？それ故、彼は、学校自体の民主主義の理想を鼓吹されなければならない」⁷と述べ、教師の存在が、教育の姿を方向付ける事を示している。

我々は、単にピアジェの述べる「子どもの自発的な遊び」のみを重んじるのではなく、そこにどのような思想が包含されているのかを、自分自身で咀嚼しなければ、彼の遊びに関する理論を理解する事は難しいと考える。換言すると、教師自ら自由に創造する思考を持つ事により、彼の理論を紐解く事が可能になると言える。

ii) ピアジェにおける遊びの教育的意義

ピアジェは子どもの遊びを語る時、芸術教育に関しても触れている。何故なら、芸術教育には、子どもの才能の中にある様々な表現手段、例えば、象徴遊びや表現遊び、歌唱等を用いて「幼児が自分の人格や個人間での経験を、自発的に表出する様になる」⁸と確信しているから

である。

これに関して、プラトンもその著書『国家』の中で「子供たちの遊びが最初から美しい（正しい）ものであって、音楽・文芸を通じて善き秩序と法を彼らが自分の中に受け入れた場合には（中略）その良き秩序と法を彼は、何事につけても彼らを離れる事なく育み、もしそれまでに国の何かが墮落して倒れているならば、それを真直ぐに建て直す事だろう」⁹と述べている。この様に、古代から現代に至るまで、歴史の流れの中では常に乳幼児期における芸術教育の視点は重視されている。加えて、ピアジェはそこに存在する教師の姿にも注目している。何故なら、子どもの表現手段を磨き、最初の出現を援助する為には、適切な教育がなければ、それは強制的教育に陥り、全ては規制の中で強制された表現手段になると考えているからである。つまり、子どもの遊びにおける教師の役割やその意義について、我々大人がしっかりと認識していなければ、遊びの中に教育的意義を見出す事は難しいのである。「知性の観点から見れば、学校は、学習を促進させる代わりに、あまりにも多くの既成の知識を与えている。しかし、人々はその事にはほとんど気づいていない。何故なら、その時に教えた事を単に繰り返している生徒が自発的な活動または豊かな好奇心を消失させてきた事を疑う事なしに、生徒が確実な収穫をもたらす様に見えるからである」¹⁰と述べる事で、痛烈に現代社会における教育の姿を批判している。彼自身は、幼い頃より自由に思考出来る学びの環境にあったが、彼の母国であるフランスでは、かつて君主制度の中で強制教育が行われていたと言う歴史がある。その過程を踏まえ、世界では教育についての議論が行われ、新教育としての流れも確立されてきたのであるが、日本の教育においては、未だ知識重視の姿は現存している。

また、彼は「知的また道徳的な権威に基づいて構築された1つの教育の理論が消去または少なくとも衰退へ至らしめる美学的活動を、教育の枠組みの中に再び導入する事をねらった必然的で同時に開放的なあらゆる試みの1つの活動として認めるべきである」¹¹と主張する事で、芸術教育における子どもの自発的活動の意義を示している。受身的な教育により増幅される知識よりも、能動的で主体的な姿により再創造される芸術教育にこそ、教育の本質である人間形成と言う視点が注がれている事を伝えているのである。

それ故、幼児教育において「子どもの芸術と呼ぶ事が出来る自発的な最初の出現は、象徴的遊びに固有な傾向とその活動に適応される形式を特徴づける傾向との協調の連続した試みとして、言い換えれば、自我の表現と現実への服従との間の統合として理解されなければならない」¹²と述べる事で、子どもの遊びに教育的意義を賦与しているのであろう。

II. 一観察記録①—ピアジェの子ども理解を視点に捉える乳幼児の遊び

ここでは、ピアジェの子ども理解の視点を軸に、遊びの教育的意義を探るため、保育者の観察記録に基づき考察を行うものとする。彼の視点とは、子どもの観察を行う視点との理解である。前述のしたように「生活があって、その生活の中に仲間がおり、また子どもの間の社会的

関係がある」¹³ゆえ、子どもの生活全体を軸に、自発的活動である遊びの観察を行うものである。

i) 観察記録を通して見えてきたもの

A市立保育所10園の所長先生方による自主保育研究会¹⁴で共に保育内容の研究を深める中、子どもをどの様に理解するかにより、保育実践も変わり保育の質も深まると言う見解に辿り着いた。そこで、ピアジェの子どもを理解する視点を軸に、様々な観察記録を取る事となった。

保育における観察記録は、子どもの成長や発達、興味や関心等を捉え、それを考察する為に必要不可欠なものである。何故なら、善きにしろ、悪しきにしろ、子どもをどの様に捉えるかにより、保育の内容も変わってくるからである。つまり、子どもの捉え方が変われば保育実践も変わると言う事である。また、それは保育の質にも深く関わってくる故、子どもの姿を観察すると言う事には十分な配慮と考察とが求められるのである。

そこで、子どもを捉える為の観察方法である。ここでは、特別に専門的なスキルを必要とするものではなく、子どもに一番近い保育者が、子どもの遊びを「ありのまま」に観察し記録すると言う事に重きを置いた。大人の身勝手な思い込みや主観の入ってこない「ありのまま」の観察の中に、子どもを捉えるヒントが隠されていると考えたからである。その為、毎日の子どもの観察が重視されるが、ここでは、何も気負う事なく、何気ない子どもの動きや発言をメモしておく。その記録を媒体とし、複数の大人で共有し合う事により、子どもの日ごろの仲間関係や関心事、発達状況等を複眼的に捉え、日々の保育や関わり等に反映させて行く事が可能となるのである。この様に、「ありのまま」の子どもの姿を積み重ねる事で、子ども自身の育つ力に気づき、その力を信じて待つ事が出来る様になる。つまり、子どもを捉える視点が養われて行くと言う事である。

尚、以下に記載される観察記録等に関し、子どもの自発的な遊びの姿を、現場の保育者達は「学び」と称している。これは前項に考察した「思考は知的機能の自由な働き (jeu)」と言うピアジェの言説に基づき、子どもの自発的な活動としての遊びには自由な思考が伴うと言う視点から、そう呼称しているのである。つまり、自発的な活動としての遊びの中には、常に子ども自身の自由な思考が働き、学びが存在していると言う事である。

観察記録 0歳児Kくんの挑戦 (T保育所)

- ① 0歳児のKくんの目に、1歳児クラスの手拭タオルが目に入る。そこでKくんが思わずタオルに触れると、タオル掛けから落ちてしまう。慌てて掛けようとするKくんだが、なかなか上手く掛ける事が出来ない。フックの部分の掛けやすい様に動かすも、やはり上手くいかない。5、6回ほど挑戦しても出来ない為、Kくんは近くにいる保育者にタオルを差し出し訴える。
- ② 保育者はそれに気づいて、そばにいた1歳児に手伝ってほしいと伝える。Kくんには「お兄ちゃんがしてくれるから大丈夫だよ」と伝える。

- ③ Kくんは1歳児のお兄ちゃんがタオルを掛ける様子をじっと見つめる。その後、1歳児が掛けたタオルを今度は故意に外し、再び真似をして掛けようとする。しかし、うまく掛ける事は出来ない。その為、今度も1歳児のお兄ちゃんにタオルを差し出す
- ④ 同じ様に1歳児の掛ける様子を見つめる。そして再び故意にタオルを外すが、やはりうまく掛ける事は出来ない。
- ⑤ この行動を再三行うKくんに対し、とうとう1歳児はKくんからタオルを取り上げる。
- ⑥ タオルを取り上げられたKくんは怒って壁をたたき続ける。

《保育者が解釈する子どもの自発的な活動の中での学びの経験》

- ・Kくんは掛かっているタオルに強い関心を持ったが、触っているうちにタオルが外れてしまった。しかし、これが身近なものへ関心を持つきっかけとなった。
- ・外れたタオルは自分の責任でもとに戻そうと必死になっていた（集中していた）。
- ・外れたタオルを掛けようと、何度も挑戦するが、まだ成功した事はない。それでもあきらめずに、フックの向きをかえる等、様々な工夫をしながら挑戦を続けていた。
- ・Kくんは、どうしたらかかるのかを1歳児の観察を行う事で解決しようとしていた。
- ・何回も挑戦しようとしたが、うまくいかず、保育者にタオルを差し出す。どうしたら良いのかと言う思いは持ち続けていた様である。

*文中の波線は担当保育者が入れたものである

《ふり返り》

Kくんは、掛かっているタオルに強い関心を示したが、触る事によりタオルは落ちてしまった。そこで何回も掛けようとしたが上手くいかず、納得して保育者に助けを求めてきた事が、彼の行動からわかった。その後、1歳児の友達がどの様に掛けるのかを何度も見ていたKくんだが、その様子からも自分で成功させたいと言う気持ちが伝わってきた。

結局、1歳児の方が怒ってしまい、タオルを取り上げる形で終わってしまったが、子どもの「やってみよう」と言う気持ちを大切に見守る事も大切であると言う事を実感した。また、乳児が生活の中で物に対して関心を示した時、その様子を見守る事は、やり遂げたと言う達成感や満足感を感じる学びの経験に繋がる事がわかった。

この観察記録から、身近なものへ興味を持った乳児が、偶然の出来事からその活動に熱中し、様々な工夫を通して困難に立ち向かい、自ら納得して助けを求めるも最後まであきらめないと、子どもの主体的な学びの活動を見る事が出来た。子どもを捉える保育者の視点によっては、「何をしているの」とすぐさま大人が割り込んだり、「タオルであそばないの」との言葉を発したりする事もあるだろう。しかし、今回は「何をしているのだろうか?」「何がしたいのだろうか?」と言う肯定的な視点から子どもを捉えた為、子どもの学びの機会を奪う事なく、更には、次への課題にも繋がった。これも「ありのまま」の観察記録を残す事で、それを根拠に子

どもを捉える視点が深まり、その行動の意味が解釈されたのである。この様に、単なる形式的記録ではなく、「子どもの今」を切り取り、その姿の意味を解釈し考察する事で、記録に教育的意味が賦与され、保育の質にも深まりが見られる様になるのであろう。

今後、このような子どもの捉え方が各所から頻繁に発信される様になると、保育者や子ども、保護者や地域等、全てを巻き込む大きなコミュニティの中で、子どもの発達や成長を複眼的に見守る事も可能になると考える。

ii) 観察記録を根拠に保育の質を深めると言う事

今回の観察では、子どもの自発的な活動に焦点をあてた記録を根拠とし、そこにある意味を複眼的に解釈する事で、自発的活動の重要性に気づく事が出来た。しかし、そこに立派な観察記録や正しい解釈がある訳ではない。また、誰の解釈が正しいかを定める為に共有するのでもない。重要な事は、観察記録を根拠に、子どもの学びの活動における意味を、複数の視点で解釈していくと言う事である。つまり、観察記録の情報を皆で共有する事により、一人一人が多面的に子どもの学びの意味を捉える事が出来る様になるのである。子どもとは複雑なものである故、大人の身勝手な視点の枠に押し込むのではなく、複雑なものを複雑なままに、「ありのまま」に捉える事も大切なのである。

今回の観察記録にあるKくんへの手立てに関しても、何が正解であるのか明確な答えは存在しない。あるのは、複雑な子どもの思いをどの様に解釈するのかと言う、複眼的な視点を持った保育者の存在である。この瞬間をノートや写真等、記録に収めておくと、後で複数の大人での共有が可能となり、自分勝手な思い込みの解釈に囚われる事なく、様々な捉え方を検討する事が可能となる。

ここで大切な事は、「出来ないとあきらめている」と否定的に捉えるか、「今、まさに自らの力で解決しようとしている」と肯定的に捉えるかの違いである。前者であると、安易に解決方法を教えてしまう大人の姿が予測される。しかし、その瞬間子どもの学びの機会は大人によって奪われる事になる。これが後者であると、子どもの姿を観察する大人の姿が予測される。そうになると、結果的に子どもを信じて待つ事が出来、それが子どもの学びを深める機会にもなり得るのである。この両者が全てではないが、「ありのまま」の観察記録を残し、それを複数の大人で複眼的に検討するという経験の積み重ねが、後者の様に子どもを肯定的に捉える事に繋がり、その結果、子どもの学びの経験を助長する事にもなるのである。その為、この「ありのまま」の観察記録が保育の質を深める為の重要な根拠の一つであると確信する。

Ⅲ. 一観察記録②—ピアジェの子ども理解を視点に捉える乳幼児の遊び

i) 連続する観察記録の必要性

A市における自主保育研究会では、その日の学びを持ち帰り、其々の場で実践研究として深めつつある。これまでの観察記録では、子どもの瞬間の姿を留める事は出来ていたが、そこからの連続性にまでは辿り着かなかった。しかし、子どもを信じてその行動の意味を探ると言う記録を積み重ねる事により、保育におけるその後の展開までもが的確に推測される様になった。それと前後して、子どもの観察記録にも連続性が見られる様になった。

観察記録① 7月24日(火) 1歳児女児(M保育所)

《子どもの記録》

- ・本児は水着に着替え始めると泣いてしまう。
- ・「プールが嫌だったら先生と水をさわって遊ぼうか？」と誘うと、泣くのをやめ保育者と一緒にテラスに出る。しかし、テラスに出ると再び泣き始める。そこで、水のかからないプレイハウスや0、1歳のたらいプールの近くに本児を誘う。
- ・すると、本児は昨年入っていた一人で入るたらいプールの様子を食い入る様に見つめる。(資料：写真①-1、2)

《保育者のコメント》

初めは、柵に顔を押し付ける事自体を楽しんでいるのかと思っていた。しかし、複数の保育者と観察したり意見交換をするうちに、「昨年はたらいプールに一人で入っていたのに」と羨ましく見ているのではないか、と言う本児の心の思いが見えてきた。

《次への展開》

一人ならプールに入る事が出来るかもしれないので、機会をみて誘っていきたい。

観察記録② 7月25日(水) 1歳児女児(M保育所)

《子どもの記録》

- ・ほとんどの子どもが入室した後、本児は自らペットボトルのジョロを両手に持って、ベビーバスの水汲み、足をぬらしながら夏野菜にかけて遊ぶ。
- ・ビュールプールに「一人だけで入る？」と聞くと、「うん」とうなずきプールに入る。
- ・着替えの時に「プールに入れたね！」と話すと、嬉しそうに笑う。

(資料：写真②-1、2、3)

《保育者のコメント》

水がかかる事は嫌ではなかった事や、一人ならプールに入れる事が、観察を続ける事を通してわかった。

《次への展開》

一人でプールに入る事で、自信に繋がっていきたい。保護者にも本児の姿や成長を伝えて行く。

観察記録③ 8月3日(金) 1歳児女児 (M保育所)

《子どもの記録》

- ・友達がプールに入り、はしゃぐ様子を本児はプールの外から見つめる。
- ・プールに入っている子ども達が、保育者に水をかける遊びが始まり、保育者が逃げる真似をして遊びだすと、それを見て本児も笑う。
- ・本児に「Sちゃんもプールに入る？」と聞くと、「うん」と言って友達と一緒に入る。
- ・友達と一緒に保育者に水をかける遊びを楽しみ、声をあげて笑いながらプールに入る。

(資料：写真③)

《保育者のコメント》

友達やプールの様子等、興味を持ってよく見ている事がわかった。友達が笑うと、本児も共感し笑って見ていた。

《次への展開》

プールに入れる自信や満足感を味わえる様にする。友達と入る楽しさが感じられる様な遊びを工夫して行く。

観察記録④ 8月9日(木) 1歳児女児 (M保育所)

《子どもの姿》

- ・「ね～。バシャバシャしよう」と、本児が友達に声をかけ、ソーダーとなって水しぶきをたてる遊びを楽しむ。
- ・カエルの様にジャンプするのも「先生、見ててな」と声を出し、自信を見せる。
- ・給食のご飯の食べ方も、大きな口で「見ててな」と食べる姿に繋がる。

《保育者のコメント》

プールで友達と思っきり遊ぶ事が出来た満足感が、苦手なものへ挑戦する力になって行く姿を見る事が出来た。

《次への展開》



資料①-1



去年入っていた、この一人のプールに入りたいの。うらやましい。

資料①-2

ほら見て！お水、冷たくて気持ちいいよ。



ちょっとだけ、触ってみようかな。本当だ、冷たいな。

ぼくが入ったら泣いちゃった。どうしよう。



資料②-1

皆、とても楽しそう。ジョウロで一人で遊ぶのもあきちゃった。私も入ってみようかな。

一人でプール楽しんでいたのに。入っちゃダメ。



資料②-2

資料②-3



「みてみて！バシャバシャするよ」（本児の言葉）皆とプールに入ると楽しいな。

資料③



資料④-1

みてみて
ワニさん歩きだよ。



資料④-2

本児が感じた自信や満足感を見逃さず、一緒に共感していきたい。

その後、この1歳児女児は、年長さんと一緒に大きなプールで「ワニさん歩き」をしながら、水遊びを楽しむまでになった。（資料：写真④-1、2）

*写真資料における吹き出しの言葉は、全て担任の記録からの言葉である

ii) 記録の連続性から学ぶ子どもの成長

観察記録をとる時に気を付けなければならない事は、子どもを大人の意見に従わせるのではなく、今の子どもの興味や関心を探り、その成長を信じて待つと言う事である。これを継続的に行う事で、見えてくる子どもの姿がある。

今回、柵に顔を押し付けている段階で、複数の保育者と意見交換をする事もなく、一人の判断で子どもを見ていたら、恐らく、本児のここまでの成長には出会う事はなかったのではないか。それが複数の保育者の意見交換により「昨年の自分の様子を思い出している」と言う視点で捉える事が出来たからこそ、本児の興味や関心にも気づく事が出来たのである。これにより、保育の次への展開への見通しも立てやすくなり、結果、友達と一緒にプール遊びを楽しむまでになった。

この様に、観察記録で最も重要な事は、観察した記録を複数の視点で共有し、意見交換をすると言う事である。この積み重ねが、子どもを捉える視点を育てると確信する。更に、子どもを観察する時には、必ず肯定的に見ると言う事である。それは、子どもの活動を信じて待つと言う事にも繋がる。子どもとは、自らの興味や関心が高まった時には必ず自発的に活動する。これを、周りの大人が「良い・悪い」や「出来る・出来ない」で判断するのではなく、何に関心を持っているのだろうか、何をしようとしているのだろうか、どこに難しさを感じているのだろうか等、子どもの内なる成長を信じて肯定的に捉えて行く事こそが保育の質を深めて行く事に繋がるのである。

今回の観察記録から、子どもを捉える視点が変われば、保育の展開も変わり、それが自ずと保育の質にも繋がると言う事を確信する事が出来た。

iii) 観察記録から次の保育への展開

今回、観察記録で重視した点に《次への展開》が挙げられる。単に観察記録をとるだけではなく、そこから子どもの心の動きを読み取り、次の保育へと展開させる事で、その質も深まって行くのである。つまり、子どもの姿をどの様に捉えるかが、保育の質に直結するのである。

記録に記載されている《次への展開》部分は、観察者一人での判断で記したものであるが、それを、後日、改めて複数の保育者で話し合う事により、様々な展開方法が挙げられた。つまり、話し合いの場を持つ事で、自らの保育にも深まりが出てくるのである。例えば、既に夏も終わりプールの時期は過ぎているが、たらいプールに一人で入りたいと言う気持ちを尊重し、保育室にも一人になれる空間を作ってみる、自分の経験を他者に伝えると言う事を体験する為にも、象徴遊びや見立て遊びの充実を図る、友達が楽しそうにしていたからこそ、自分もプールに入りたいと思えたのだから、友達存在を大切に保育の展開を考える、等がそうである。

この様に、子どもの経験は全て自発的な活動に基づいており、それは、大人の子どもの成長

を信じて見守ると言う姿に裏打ちされている。そして、それら全ては子どもの生活の中で成されているのである。つまり、生活と切り離された場所で行われる子どもの経験はないと言う事である。これは冒頭でも述べた「生活があって、その生活の中に仲間がおり、また子どもの間の社会的関係がある」¹⁵とのピアジェの言葉とも符合する見解である。

おわりに

今回、A市における自主保育研究会に参加している保育者により、多くの観察記録が収集された。その記録の手段は様々であったが、子どもを全面的に信じる事を前提に、子どもの主体的活動としての遊びに視点を据え、それを大人の価値観で判断するのではなく、子ども自身の学びを考察すると言う事に視点を置くよう心掛けた。何故なら、子どもの全てを信じると言う気持ちは、「我々大人が子どもを信じる事により支えられる」¹⁶からである。これが前提にあつてこそ、自発的な活動としての遊びに深まりが見られるのである。勿論、そこには個々人における発達過程の課題に沿った保育環境が準備されなければならない。

ピアジェも教育環境に関しては常に鋭い指摘を行っている。また、それは人的環境としての保育者の資質にまで及ぶものである。「知的自由の教育は、協力と共同による探求を前提としている。生徒と教師との間に存在する関係は、教師＝権威者であると言う視点から不十分である。もし批判的精神と証明の意味を教えたいのであれば、生徒達は、共同による仕事を実行したり、また1日のある時間を自由に議論する事が必要である。学校自体の中に、生徒自身による自発的な社会生活が必要となる」¹⁷と述べている事からも理解できる。そして、今回の観察記録は、彼の言葉を各園で咀嚼し応用したものである。保育者は決して権威者ではない。常に子どもを信じ、その行動を見守る存在である。それ故、子どもは納得の行くまで自らの学びを深める事が出来る。ある時には、そこに仲間がおり共同による遊びによって各自の学びが深められる。またある時には、遊びの中で自分の意見を自由に述べる事により学びが深められる。この様に、自発的な活動としての遊びと共に、自発的な社会生活をも営む事が出来ているのである。

しかし、本論の観察記録にあつた子どもを理解する視点の構築は、容易なものではなかった。保育者としての経験年数が長ければ長いほど、自らの保育を一から見直すと言う作業に困難を極めたからである。A市における自主保育研究会の保育者達も、初めは無意識の内に権威者として保育を積極的に導くと言う指導に明け暮れていたと言う。しかし、現場の保育者達から、もっと真の子どもの姿を捉える学びをしたいと言う内発的な動機に支えられ、ゆっくりとではあるが、確実に子どもを捉える視点を育んできたのである。

ピアジェも子どもの観察に関して「子どもの言う事を抑えたり伸ばしたりする事なしに如何に観察すべきか、即ち子どもをして自由に話させるべきかを知らねばならない」¹⁸と述べている。つまり、子どもを観察する手法として、いかに「ありのまま」の姿を捉える事が出来るか

と言う点に着目しているのである。

しかし、実際の保育現場において、それを観念で理解していても、子どもの興味や関心に裏打ちされた自発的な活動としての遊びの観察とは、非常に曖昧な側面を包含しているゆえ、その捉え方に難しさを覚える事はあるであろう。それ故、単なる観察記録ではなく、子どもを信じる事により見えてくる学びを中心とした肯定的な視点と、それを保育者間で共有する事により考察を深める事が、観察には重要であると考え。これを今後の課題とし、継続的に遊びの教育的意義及び保育の質を探究していく所存である。

- 1 *J.Piaget, le langage et la pensée chez l'enfant, Neuchâtel, DELACHAUX & NIESTLÉ, 1923, p.66.*
(大伴茂訳『児童の自己中心性』同文書院, 1974年, 96頁.)
- 2 *J.Piaget, De la pédagogie, Paidos edu cador, 1998, p.182.* (芳賀純,能田伸彦『ピアジェの教育学』三和書籍, 2005年, 147頁.)
- 3 *Ibid., p.158.* (邦訳, 148頁.)
- 4 *Ibid., p.148.* (邦訳, 158頁.)
- 5 *Ibid., p.160.* (邦訳, 150頁.)
- 6 *Ibid., p.161.* (邦訳, 150-151頁.)
- 7 *Ibid., p.161-162.* (邦訳, 151頁.)
- 8 *Ibid., p.195.* (邦訳, 183頁.)
- 9 プラトン著, 藤沢令夫訳『国家』岩波文庫, 1999年, 274頁.
- 10 *Op.cit., J.Piaget, De la pédagogie, p.197.* (邦訳, 185頁.)
- 11 *Ibid., p.197.* (邦訳, 185頁.)
- 12 *Ibid., p.196.* (邦訳, 184頁.)
- 13 *Ibid., p.161.* (邦訳, 150-151頁.)
- 14 A市では保育所の民営化が進んでいる。最終的には、現在の半分にまでなる予定である。その様な中、どの様な状況にあっても保育の質は守るべきと言う思いから、近隣の保育所と連絡を取り合い所長等が集まり、月に一度、自主保育研究会を持つ様になった。本論では以降、この研究会をA市における自主保育研究会と呼称する。
- 15 *Op.cit., J.Piaget, De la pédagogie, p.161.* (邦訳, 150-151頁.)
- 16 猪田裕子著「乳幼児における子どもの心性とcroyanceについての一考察—ピアジェの子ども理解の視点を軸に—」『児童教育学研究』第37号, 神戸親和女子大学児童教育学会, 2018年, 7頁。ピアジェは子どもの自己中心性を善の視点から理解しようとする時、子どもの心性をcroyanceと言う言葉で表現している。この、全てを信じる子どもの心性croyanceは、大人が子どもの全てを信じる事により支えられるのである。
- 17 *Op.cit., J.Piaget, De la pédagogie, p.160.* (邦訳, 150頁.)

18 J.Piaget, *La représentation du monde chez l'enfant*, puf, 1947, p.11. (大伴茂訳『児童の世界観』同文書院, 1956年11頁.)

〈参考文献〉

猪田裕子著「乳幼児における子どもの心性と croyance についての一考察—ピアジェの子ども理解の視点を軸に一」『児童教育学研究』第37号, 神戸親和女子大学児童教育学会, 2018年.

J.Piaget, *Psychologie et pédagogie*, denoël, 1923. (竹内良知／吉田和夫訳『教育学と心理学』明治図書出版, 1975年.)

J.Piaget, *La représentation du monde chez l'enfant*, puf, 1947. (大伴茂訳『児童の世界観』同文書院, 1956年.)

J.Piaget, *Le jugement moral chez l'enfant*, puf, 1932. (大伴茂訳『児童道徳判断の発達』同文書院, 1957年.)

J.Piaget, *Le langage et la pensée chez l'enfant*, delachaux et Niestlé, 1941. (大伴茂訳『児童の自己中心性』同文書院, 1974年.)

J.Piaget, *Où va l'éducation*, Gallimard, 1972. (秋枝茂夫訳『教育の未来』法政大学出版局, 1982年.)

J.Piaget, *De la pédagogie*, Paidós, 1998. (芳賀純, 能田伸彦『ピアジェの教育学』三和書籍, 2005年.)

厚生労働省著『保育所保育指針解説』フレーベル館, 2018年.

文部科学省著『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2018年.

内閣府, 文部科学省, 厚生労働省著『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館, 2018年.
プラトン著, 藤沢令夫訳『国家』岩波書店, 1999年.